



2020.7
vol.221

北館横



これぞ 友どち ああ ゆかし 学校長 飯山 等

この稿を書いているのは6月23日。「沖縄慰霊の日」です。沖縄戦では、住民を巻き込んだ激しい地上戦で20万人を超える人が犠牲になり、沖縄県民の4人に1人が命を落としました。75年前に沖縄の地で、米軍に捕まれば虐殺され強姦されるという恐怖を植え付けられていた多くの人々は、避難所となった自然洞窟のガマに自ら火を放って、集団自決という痛ましい死を選びました。鬼畜である敵を殺し、自らも死ぬことが国民の使命とされていた戦争だったのです。しかし、その中で住民が投降して多くの命が救われたガマもありました。「自決すべきだ」との声を後ろに、外へ出て米兵と話し、みなを説得しました。その人は普段は「非国民」と言われていたハワイ移民帰りの老人でした。(朝日新聞「天声人語」6月23日より)

「俱会一処^{くえいいつしょ}」(仏説阿弥陀經)という聖言があります。鬼畜ではなく、一処^{ども}に会する俱なるいのちとして、愛憎、好悪、利害を超えて、溶け合い、響き合って存在するわたしたち。どこまでもやわらかくひろがりゆく「いのちの大地」を想う。日本赤十字社が4月に『ウイルスの次にやってくるもの』と題した動画をウェブサイトで公開しました。ウイルスへの恐怖が広がって人と人とが互いに傷つけあう状況を描いて、「そのような恐怖は、ウイルスよりも恐ろしいかもしれない」と警鐘を鳴らしています。そして、非難や差別の根っこに自分の過剰な防衛本能があることに気づこう、不確かな情報をうのみにせず立ち止まって考えよう、いつものようにきちんと食べて眠り、正しく知り、正しく恐れて、互いに励まし合おうと呼びかけています。

本稿のタイトルにした「これぞ友どち ああゆかし」は大谷の校歌2番

の一節です。「どち」は、「たち。どうし。」の意の古語。「ゆかし」は、動詞「行く」に対応する形容詞で、辞書には、「①(直接に)見たい。聞きたい。知りたい。②なんとなく慕わしい。なつかしい。」と説明されています。心がひきつけられ、心が進んで行く。友と、時間と場を共有することで、生きる喜びがあふれる。友の存在が、自分自身を前に進めて行く。そして、自身もまた、そのような「ゆかし」友の一人として、生きる場と時を大いなる恵みとして共有している。

感染症の拡大を防ごうとする対策が、人と人との距離を「ソーシャル・ディスタンス」、物理的に遠くしています。愛する人に病をうつしてしまう可能性がある。愛情表現である接触が愛する人を奪いかねないという、感染症そのものが持つ「非人間性」です。しかし、喧伝されている「新しい生活様式」の要諦をこころ落ち着けて考えれば、「自分を守り、他人を守る」という思いやりで満たした行動様式のことです。「自粛警察」のような行動の背景には過度な不安や恐れがあります。この先コロナがある程度解決した後に、我々の社会が分断していないように、思いやりで満たした社会を作っていかなければなりません。

6月21日、世界全体で新たに確認された新型コロナウイルスの感染者は18万人を超え、1日あたりではこれまでで最も多くなったとして、WHO=世界保健機関は、すべての国に検査や感染者の隔離などの対策をもう一度強化するよう呼びかけました。未来は予測不能という冷厳な事実を、あらためて厳しく知らしめられたこのコロナ禍です。このOTANingをあなたはどのような世界状況の中で手にしているでしょうか。この状態がいつまで続くのか、まだ出口は見えません。しかし、思うことは、やはり人と人とのつながりこそが大切であるということです。このつながりが人と社会を回復させる力です。